My Ántonia –
芸術家としてのアントニーア

外国語学部　英語英文学科　4年
幸喜　香奈

序

ウィラ・キャザー(Willa Cather, 1873-1947)の『マイ・アントニーア』(My Ántonia, 1918)のアントニーア・シメルダ(Ántonia Shimerda)は芸術家である。この物語では両親を失った裕福な少年であるジム・バーデン(Jim Burden)がヴァージニア州から祖父母のいるネブラスカ州に移住し、そこで出会ったボヘミアからの貧しい移民であるアントニーアと少年時代を過ごし、大人になり再会するまでを、ネブラスカの美しい自然を背景にノスタルジックに語られる。

アントニーアは貧しいが、置かれた状況で最善を尽くし幸せであろうとする強さを持ち、その姿がジムに感動を与えた。次の場面ではアントニーアの強さが表れている。

> 「もし、あたしが、あんたみたいにここに住んでいたら、話は別よ。生きるのが楽だもの。でも、あたしたちには厳しいんだ」
> "If I live here, like you, that is different. Things will be easy for you. But they will be hard for us." (MA 140) [1]

貧しい家庭に生まれたアントニーアはジムが豊かな生活をすることや教育を受けることを羨ましいと思いながらも、家族のために日々懸命に働く運命を受け入れ、それを誇りに思っているのである。

開拓者として生きることを決心し果樹園を完成させたアントニーアは芸術家である。芸術家は本来、絵や彫刻などの作品を創造する人を指すが、アントニーアは大地を愛し、開拓し共存し続け、何もなかった大地に果樹園を自分の力で創り上げた芸術家なのである。

本稿では、アントニーアが大地の開拓者として生きることで幸せを得た芸術家であったこと、また彼女が自身の心の強さによって芸術家であり続けることができたことを考察したい。

Ⅰ. 開拓地の女性たち

大地のほか何もない開拓地で女性たちが行きぬくには、そこで生きていくという決意と心の強さが必要であった。ジムは両親を失って祖父母の元で暮らし始めるが、ジムの日常の中には逞しく生きる祖母の様子が多く語られる。

> 彼女は動作が敏捷で、活力にあふれていた。…笑い声も甲高く、少々耳触りだったが、生き生きとした知性が感じられるものでもあった。当時、彼女は五十五歳で、並外れた忍耐力をそなえた強い女性だった。
> She was quick-footed and energetic in all her movements.　…Her laugh, too, was high, and perhaps a little strident, but there was a lively intelligence in it. She was then fifty-five years old, a strong woman, of unusual endurance. (MA 10)

忍耐力は開拓者には重要なものである。力の必要な農作業に、夏の暑さや冬の食糧不足は、開拓者たちを苦しめる。しかしその困難を乗り越えた者だけが広く農地を開拓し、多くの食糧や快適な生活を手に入れることができる。ジムの祖母は強

い忍耐力によってこの困難を乗り越えるのである。

ジムの祖母は開拓地で生きる方法を知っている強い女性を代表して登場するが、移民であるシメルダ家は言葉も土地の耕し方も知らないまま移住したため、物語ではジムの祖母以上に苦労を強いられる人々であった。そのシメルダ家の中でもアントニーアはジムにとって特別な存在であり、彼女が困難を乗り越え懸命に生きる姿は印象的である。

アントニーアが十五歳になった時、同年代には学校に通う者もいたため、ジムが彼女に学校に通わないかと尋ねると次のような様子を見せる。

「あたしには、勉強している暇なんかない。男のように働けるんだもの。母さんに、アンブローシュが一人で何もかもやって、誰も手伝わないなんて言わせない。兄さんと同じくらい働ける。学校は小さな男の子にはちょうどいい所よ。あたしはこの土地を立派な農場にする手伝いをするんだ」彼女は舌を鳴らして馬に合図し、納屋の方に歩きはじめた。…納屋に着く前に、ぼくは彼女の沈黙に何か張りつめたものを感じて目を上げると、彼女は泣いていた。彼女はぼくから顔をそむけ、暗い大平原の上で薄れていく夕焼けの赤い光に目をそむけた。

'I ain't got time to learn. I can work like mans now. My mother can't say no more how Ambrosch do all and nobody to help him. I can work as much as him. School is all right for little boys. I help make this land one good farm.' She clucked to her team and started for the barn. …Before we reached the stable, I felt something tense in her silence, and glancing up I saw that she was crying. She turned her face from me and looked off at the red streak of dying light, over the dark prairie. (MA 123)

彼女は父親が亡くなったことや貧しい自分達の苦労を乗り越え、自分は女だからという理由で弱くいるのではなく、心を強く持ち続けることで家族を守ろうと決心している。そしてジムから目を背けて泣く姿は、本当は貧しい生活を苦しんでいるがその苦しみを表に出さず、また苦しみを認めず、自分は男のように働いて立派な農場を作るのだと自分に言い聞かせることで心を強く保っているのである。

このように、開拓地で女性が生きていくにはジムの祖母やアントニーアのように心を強く持つ必要があり、その強さによってジムの祖母は快適な生活を守り続け、ジムに不自由をさせない生活をすることができた。そしてアントニーアは農業について何も知らなかったが家族を支え自分も幸せでいようと努力し続けることで開拓者として生きていくことができた。

Ⅱ. もう一人のヒロイン

リーナ・リンガード (Lena Lingard) は物語でアントニーアと対照的な生き方をする女性として描かれ、その姿は開拓者として生きるアントニーアを引き立たせている。開拓者の娘として育ったが町に移り住み町で働くようになったリーナは都会の娘と女性らしさの典型的な存在であり、父親を失ってから男性のように働き振る舞いや身なりの変わったアントニーアをよく思わないジムにとって魅力的な「女性らしい女性」としてジムの目に映る。

農家の娘であったリーナは本心では農業から逃げ出したいという気持ちがあり、町に出てからは町での仕事を見つけ、人に頼らず自分の力で生活している。そしてその仕事により、開拓地で農業を続ける家族が町に出られるように多くの金を稼ぎ家族を助けるという強い意志があった。また、町に出ると町の娘らしさを感じる優美な服を纏い始める。彼女は強い意志を持って開拓地を去り、町の娘になったのである。

リーナと対照的に、アントニーアは父親の死後、家族のためにより熱心に開拓の仕事をするようになり、その生き方は「町の娘」と「開拓地の娘」では大きく違い、服装や振る舞いにまで差をもたらす。

アントニーアは周囲の人たちと同じように話すことは決してなかった。英語が容易に話せるようになっても、彼女の話し方には、いつも何か衝撃的で異国風なところがあった。しかし、リーナはトーマス夫人の洋裁店で聴いた慣習的な表現をすべて身につけていた。小さな町の礼儀作法の見本のような堅苦しい表現や、ほとんどすべて偽善的な感情が作り出した常套句は、リーナの柔らかな声と愛撫するような抑揚、悪戯っぽい素朴さで発せられると、おかしくて魅力的に聞こえた。

Ántonia had never talked like the people about her. Even after she learned to speak English readily, there was always something impulsive and foreign in her speech. But Lena had picked up all the conventional expressions she heard at Mrs. Thomas' s dressmaking shop. Those formal phrases, the very flower of small-town proprieties, and flat commonplaces, nearly all hypocritical in their origin, become very funny, very engaging, when they were uttered in Lena' s soft voice, with her caressing intonation and arch naïveté. (MA 281)

アントニーアは町で暮らすようになっても周囲の人たちに溶け込むような話し方になることはないが、リーナは周囲の人と同じような話し方を身に付け、土地に馴染んでいることがわかる。この場面では話し方の点でリーナは肯定的に語られ、反対にアントニーアは否定的に語られている。これはジムがアントニーアの振る舞いに不快感を抱くようになったのに対しリーナの振る舞いは女性的で美しいと感じ、それを評価しているからである。このようにこの場面ではジムの二人に対する見方の違いがアントニーアの開拓者の女性としての存在を引き立たせている。

そして結婚に対するイメージは、アントニーアの結婚生活と正反対である。ジムがリーナに結婚についての話題を持ちかけた時、リーナは結婚をする気がないと彼に伝える。

物心ついてからいつも、重たい赤ん坊を抱き、あかぎれができた小さな手と顔を清潔にしようと、赤ん坊の体を洗う手伝いをしていた。彼女の記憶では、家庭とは、いつも多すぎる子どもと、不機嫌な男と、病身の女の上に仕事が山積みになっているところだった。

She told me she couldn' t remember a time when she was so little that she wasn' t lugging a heavy baby about, helping to wash for babies, trying to keep their little chapped hands and faces clean. She remembered home as a place where there were always too many children, a cross man and work piling up around a sick woman. (MA 291)

彼女は幼い頃からきょうだいの面倒を見ながら家畜の番をして家族を支えてきたが、結婚して家庭を持つことに夢や希望を持つことができない。結婚をしないという選択をした彼女をジムは理解することができないが、リーナは結婚して子育てをするアントニーアと対照的な存在であり、アントニーアの開拓者としての人生がより印象的になる。

リーナのように結婚よりも仕事を選ぶ女性は19世紀末に多く見られ、このような女性は「新しい女」と呼ばれる。この時代の女性は「結婚という伝統的家庭性か賃金を伴う仕事というキャリアのどちらかを選ぶという厳しい選択を迫られた」「十九世紀末に大学教育を受けた全女性のうち、ほぼ半分が結婚しなかった」(エヴァンズ 234)とエヴァンズは述べる。リーナは結婚をせずキャリアを選んだという点で、「新しい女」と言える。リーナがこのように位置づけられることで、アントニーアを対照的な「開拓地の娘」と位置付けることが容易になり、二人の対比をすることができる。

そして結婚をせず自立した女性として町で働くリーナは結婚して11人の子供と開拓を続ける開拓者としてのアントニーアを引き立たせる女性として存在している。

Ⅲ. 困難と共に生きる

裕福なジムの存在は困難を乗り越えながら生きるアントニーアの強さを引き立たせている。ジムは

裕福で不自由のない環境の中で育つ。一方でアントニーアは貧しい移民であり、服や食料を豊富に手に入れることのできない厳しい生活をしている。二人の生活環境の違いは大きく、アントニーアが困難にめげず開拓者として強く生きることを強く印象づけるのにジムの豊かさは重要な要素となる。

シメルダ家は貧しい家庭である。そして英語を話せないシメルダ家にとってアメリカで新しい生活をすることはとても難しく、彼らに農場を売ったピーター・クライエックはまるでシメルダ家が納得のいく取引をできるほど英語を話せないことを利用するように自分だけに都合の良い取引をしたことでシメルダ家は金に余裕がなくなり、家を建てることができずに洞穴を家にすることになった。ボヘミアにいた頃はある程度豊かな暮らしをしていたシメルダ家だが、言葉が通じないことで自分達の生活を守ることが困難となり、貧しくなってしまったのである。一方でジムの祖父母の家は次のように表現される。

> ブラック・ホークの西側では、数軒の木造家屋があるノルウェー人の居住地までの間、我が家が唯一の木造家屋だとのことだった。この近隣の人たちは、芝土の家かダッグアウトに住んでいたが、それらの住居は居心地はいいが狭苦しかった。
> I had been told that ours was the only wooden house west of Black Hawk—until you came to the Norwegian settlement, where there were several. Our neighbours lived in sod houses and dugouts—comfortable, but not very roomy. (MA 13-14)

シメルダ家のように耕す土地と住むための洞穴しか持っていない人々がいる中、ジムの住む家は木造家屋であり、その生活環境の違いがわかる。ジムの祖父母は寒い冬を越える方法を知っている上に快適な生活ができる家を持っているが、洞穴に住むシメルダ家はまだネブラスカでの生活の仕方に精通していない上に冬を越えるための十分な防寒着も持っていない。この差は明確に描かれ、特にシメルダ家が初めて経験するネブラスカの冬に表れている。シメルダ家はまだ食料の保存の仕方を知らず、食べ物を腐らせてしまうなど食糧不足に苦しみ、彼らの様子を見にジムの祖母、ジム、ジェイクの三人でシメルダ家を訪問するが、そこでの場面はシメルダ家がネブラスカでの冬に苦労していることがわかる。

> 祖母は、彼らの窮乏と自身の怠惰を認めることはせず、礼儀正しいヴァージニア風の態度で話しつづけた。そこへ、シメルダ夫人の非難に直接応える形で、バスケットを持ったジェイクが到着した。この気の毒な婦人は泣き崩れた。彼女は頭のおかしい息子のかたわらに倒れこむと、膝に顔を埋めて激しく泣いた。祖母は彼女には取り合わず、アントニーアに声をかけ、バスケットの中身を出すのを手伝うようにと言った。トニーは気が進まない様子で部屋の隅から出てきた。これほど打ちひしがれた彼女を見たことはなかった。
> Grandmother went on talking in her polite Virginia way, not admitting their stark need or her own remissness, until Jake arrived with the hamper, as if in direct answer to Mrs. Shimerda's reproaches. Then the poor woman broke down. She dropped on the floor beside her crazy son, hid her face on her knees, and sat crying bitterly. Grandmother paid no heed to her, but called Ántonia to come and help empty the basket. Tony left her corner reluctantly. I had never seen her crushed like this before. (MA 73-74)

ジムの祖母は冷静に話をするのに対しシメルダ夫人は取り乱しており、腐った食材に絶望している。この二人の違いは開拓地での生活に慣れた女性と不慣れで苦労をする女性の苦労の差を感じさせる。そして、ジムが強い女性だと思っていたアントニーアまでもが打ちひしがれることから、移民の開拓者にとってネブラスカでの冬がどれだけ厳しい生活かがわかる。一方でジムの家では

> 祖母はしゃれたケーキ型を探し出してジン

ジャーブレッドの人間や雄鶏を焼き、ぼくたちはそれに焦がした砂糖と赤い肉桂の粒で飾りをつけた。

Grandmother hunted up her fancy cake-cutters and baked gingerbread men and roosters, which we decorated with burnt sugar and red cinnamon drops. (MA 81)

とあるように、クリスマスに菓子を作るような余裕のある生活をしている。この生活環境の違いによって、ジムの裕福さがアントニーアの貧しさを引き立てている。

Ⅳ. アントニーアの果樹園

アントニーアが芸術家であることが特に示されているのは、20年を経てジムが彼女に再会する場面である。ジムは昔から変わらない彼女の逞しい様子に感動するが、アントニーアは大人になったジムに気が付かず、ネブラスカで変わらず生き続けるアントニーアと都会で変化を伴って生きるジムの大きな違いを感じさせる。

シメルダ家は、最初は農業について何も知らず、また英語がわからない彼らには周囲の力を借りることも困難であり厳しい生活であった。長男であるアンブローシュ(Ambrosh)が重要な存在だと考えられているが、積極的にジムに英語を習い、ジムの祖母には家事を習い、父の自殺を乗り越え家族の支えになり続けたアントニーアこそシメルダ家にとって重要であった。彼女は何事も諦めずにやり遂げる力があり、希望を失わず幸せであろうと努力することで、困難を乗り越えて開拓者として生き続けた。その心の強さによって、一本の木も生えていなかった土地に自らの手で果樹園を完成させた。そして彼女が作り上げた果樹園の描写は絵画のように美しく、ジムの心を引き付ける。

まず、針金の垣根、それから、棘のあるニセアカシアの生垣、そして、夏の熱風を遮り、冬には木々を守ってくれる雪を吹き飛ばされないように留めておく桑の垣根だった。生垣は丈が高かったので、見えるのは頭上の青空だけで、青い納屋も風車も視界にはなかった。午後の太陽が乾いた葡萄の葉を通してぼくたちに降り注いだ。果樹園は、陽光が溢れんばかりに注がれた茶碗のようで、熟した林檎の香りが漂っていた。クラブアップルは、枝に数珠つなぎに密集し、赤紫の果実には、かすかな銀色の光沢があった。雌鶏や家鴨が生垣の隙間から入ってきて、落ちた林檎をついばんでいた。雄鶏は毛並が美しく、ピンクがかった灰色の体と、孔雀の首のように青く変化する、虹色に輝く緑の密な羽毛に覆われた頭と首をしていた。

[T]he wire fence, then the hedge of thorny locusts, then the mulberry hedge which kept out the hot winds of summer and held fast to the protecting snows od winter. The hedges were so tall that we could see nothing but the blue sky above them, neither the barn roof nor the windmill. The afternoon sun poured down on us through the drying grape leaves. The orchard seemed full of sun, like a cup, and we could smell the ripe apples on the trees. The crabs hung on the branches as thick as beads on a string, purple-red, with a thin silvery glaze over them. Some hens and ducks had crept through the hedge and were pecking at the fallen apples. The drakes were handsome fellows, with pinkish grey bodies, their head and necks covered with iridescent green feathers which grew close and full, changing to blue like a peacock’s neck. (343-44)

アントニーアが作り上げた果樹園はまさに芸術作品のように色鮮やかで、植物や納屋や家畜などのすべてが美しい作品であり彼女の財産である。

ネブラスカの大地はジムとアントニーアが住み始めた当初から美しく、開拓前の大地そのもののようなアントニーアの姿は20年という長い年月を経ても少女時代と変わらず逞しくあり続け、再会の場面でも大地と一体となってジムを感動させる。一方で、自然は変わりゆくものであり、開拓前には何もなかった土地にはアントニーアの手によっ

て長い年月を経て畑や麦藁の山が完成した。そして彼女が創り上げた果樹園は開拓者としての人生の集大成のようで、クーザック家に豊富な食料をもたらすものとなった。このようにアントニーアが自力で果樹園を作り上げる芸術家であることができたのは彼女の心の強さによって開拓者として生きてきたからである。そして、大地を愛するということも重要であった。アントニーアはジムの都会の生活について聞きながら次のように語る。

> 麦藁の山の一つ一つ、一本一本の木を知っているところに住みたいの。大地があたしを受け入れてくれるところにね。あたしは、ここで生きて、ここで死にたい。
> I like to be where I know every stack and tree, and where all the ground is friendly. I want to live and die here. (MA 320)

父親が愛していたボヘミアを彼女も愛し、故郷を恋しく感じたこともあったが、ネブラスカで生きていくことを受け入れ、ネブラスカで生涯を終えたいと思えるほどに愛することができた。この愛があって果樹園を作ることができたのである。

結

『マイ・アントニーア』のアントニーアは芸術家である。彼女は何もない大地を耕し、木を一本一本植え、自分達の果樹園を作り上げた。そして彼女の果樹園に語り手のジムは感動し、その美しさは鮮明に語られる。

『マイ・アントニーア』では19世紀末から20世紀にかけてのヨーロッパからの移民の生活が描かれ、ネブラスカに不慣れでまだ開拓についての知識のない彼らの生活は不自由であり、特に物語の中心となるシメルダ家の生活には多くの苦難があった。そして特に、女性が開拓者として生きていくことは困難であり、アントニーアは心を強く持ち続けることによって家族を支え、自分も幸せであろうと努力することでその困難を乗り越えることができた。

アントニーアの強さや開拓者として生きる決意は、裕福で不自由のない生活をして教育も十分に受けることのできたジムや開拓地出身でありながら自立して町に出て働き服装も振る舞いも町に馴染んだリーナと対比され、引き立てられている。

農作業をする様子からだけでなく、彼女の容貌からも開拓者で生きる女性あることが感じられる。アントニーアは褐色の肌や髪を持っていて、ジムは彼女に初めて会った日から惹きつけられる。そしてジムは20年を経て再会した彼女もまた同じように美しく、活力や輝きを失っていないことを知り、再び惹きつけられる。アントニーアは大地に生まれ変わらせて果樹園を作り上げたが、自分自身は変わらず開拓地の大地そのもののような存在としてあり続けるのである。

このように、アントニーアは強さと決意によって開拓地で生き続け、土地を耕し何もない土地に自分達の果樹園を完成させた芸術家であった。

註

1　My Ántonia はMAと略し、本書からの引用は頁数を示す。引用部分の日本語訳は佐藤宏子訳を借用。

引用文献

Cather, Willa. My Ántonia. 1918. Boston: Houghton, 1946. Print.
―『マイ・アントニーア』佐藤宏子訳　みすず書房　2010年
クック、アリステア『アリステア・クックのアメリカ史[下]』鈴木健次、櫻井元雄訳　日本放送出版協会 1994年
エヴァンズ、サラ、M　『アメリカの女性の歴史』小檜山ルイ、竹俣初美、矢口祐人訳　明石書店　1997年
藤井爽「『私のアントニーア』の二つの女性像―キャザーのイントロダクションにおける戦略」『多元文化』9(2009):125-40. Web.10 May 2017.
Sato, Kazuhiro. “My Ántonia: Art Versus Marriage.”『弘前学院大学・弘前学院短期大学紀要』27(1991): 1-8. Web. 17 May 2017.
玉崎紀子「『私のアントニーア』―因習的な女らしさに立ち向う開拓の女性―」『中京大学教養論叢』41.4(2001):591-609. Web.26 Apr. 2017.